

## 武蔵野幕屋創立52周年記念集会祈禱会

## 霊戦

――ルカ伝12章49～51節、エペソ書6章10～20節――

1992年9月20日

小池辰雄

「しろがねの紐の」 我は火を地に投ぜんとて来れり 霊的な武装 御霊の戦いの毎日 武蔵野  
幕屋は分散して生きる 祈り

## 【ルカ12】

49 我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50 されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。51 われ地に平和を与えんために来ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。

## 【エペソ6】

10 終に言わん、汝ら主にありて其の大能の勢威に頼りて強かれ。11 悪魔の術に向かいて立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。12 我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威、この世の暗黒を掌どるもの、天の処にある悪の霊と戦うなり。13 この故に神の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。14 汝ら立つに誠を帯として腰に結び、正義を胸当として胸に当て、15 平和の福音の備を靴として足にはけ。16 この他なお信仰の盾を執れ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。17 また救の冑および御霊の剣、すなわち神の言を執れ。18 常にさまさまの祈と願とをなし、御霊によりて御霊に在りて祈り、また目を覚して、凡ての聖徒のためにも願いて倦まざれ。19 又わが口を開くとき、言を賜わり、憚らずして福音の奥義を示し、20 語るべき所を憚らず語り得るよう、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。

## ●「しろがねの紐の」

讃美歌518番は昔のと歌詞が違う。兄が昔歌っていた。私は兄の歌っているのをよく聞いていました。昔は「白銀の紐の」という言葉で始まっている。何故、兄がこの歌を愛唱していたか。もう、ハッキリいいます。兄は本当はロンドンに往くはずだった。それが、あの英語の達者な兄がロンドンに往かれないで、上役が自分の知っている人と切り替えて、



北京にやった。これは兄にとって非常に心外であった。もう一つは、兄が結婚しようと思っていた女性があつた。そのお母さんは、その娘さんと兄とを結婚させたいと非常に思っていた。ところが、その娘さんの親父が海軍の将校で、自分の弟子の方にこの女性を移してしまつた。結婚の上でもそのような横取りをされ、就職の上でもサタンの横取りをされ、兄の心境がよく分かるんです、なぜこの歌を彼が好きだつたのか。私に言いました、

「僕は長く生きていないよ」

と。ということは、

「もう自分はある女性でなければ結婚しない」

ということ。ワシントン・アービング (Washington Irving, 1783～1859) は、彼の許嫁が結婚の一週間前に風邪をひいて亡くなつて、彼は

「あの女性でなければ自分は結婚しない」

と言つた。これは彼の『スケッチブック』という有名な本の中に哀調をおびて書いてある。兄は二つ自分のあるべきところを奪われて、この世にあまり未練がなくなつてしまつた。もちろん、北京に行つて素晴らしい仕事をしました。人の五、六倍の仕事を彼がしたので、上役が、

「小池政美君の死は国家の損失だ」

と言つた。正直、兄は優秀でした。しかし彼は、

「自分はシナで伝道する」

と、その計画も立てました。日本には帰らない。いろんな結婚の申込みが他のひとからありました。全部断つた。そういうことで、兄がこの歌を好きだつた意味がお分かりになると思います。(独唱)

「しろがねの紐の たゆる日はありなん

その時来たらば 御国にのぼりて

親しくわが主に 告げまつらまほし

救いを受けしは み恵みなりしと

(讚美歌 518 旧歌詞)

私の耳には、今でも、彼の声が残っています。時々歌っていました。いろんな意味で、私にとっては、兄の存在というものはこの集会の源泉となつている。彼がいなければ、私はこの集会を開くことはなかつた。それくらい、私の伝道はこの兄の弔い合戦です。そして、私的な意味では、この兄と失明の母のためには、私は詩を書かざるを得ない。もちろん、詩の中に表れてきます。

「デバイン・リベンジ」(聖なる復讐)

という言葉がありますが、ダンテの『神曲』が「神聖なる復讐」という。私の詩もまた「デバイン・リベンジ」であります。私にはそれだけの戦いをする責任と義務と光栄がある。



この兄にそういうものをもって、全生涯をもって応えるわけです。だから、私は烈々たらざるを得ない。

●我は火を地に投ぜんとて来れり

それでは、「霊戦」の話に入ります。キリストの、「我は剣を投ぜんために来た。平和ではない」

という凄い言葉がある。全然矛盾した二つの言葉。「平和の君」といわれるキリストが「剣を投ぜんために来た」と言う。平和ではない。ルカ伝12章に、

「<sup>9</sup>我は火を地に投ぜんとて来れり。<sup>きた</sup>聖霊のことです。

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。<sup>50</sup>されど我には受くべきバプテスマあり。

十字架のこと。

その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。

「十字架をなし遂げてから自分は聖霊を降す。それまでは聖霊をくださない」ということがこのキリストの一句でハッキリする。

<sup>51</sup>われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。」(ルカ12・49～51)

「戦いだ。この福音の真理のためには、この世の秩序は破れるかもしれない。知らないぞ」

と。凄いですね。非常に柔和なるキリストはまた一面、いかなる英雄もかなわない烈しきを持つている。賀川さんは無抵抗で非常に優しい人だが、彼もまた、真理のためには烈しかった。無抵抗の強さというものを持つている。本当の勇者は無抵抗で、無手勝流なんです。私は宮本武蔵の『五輪の書』を読みましたけれども、武蔵はまだ最後のところを書いてないな、と思った。本当の無刀の世界。とにかく、空手の世界は一番強い。というのは、キリスト自身がそれを現した。

「私は何もできなない」

という霊止が一番凄いことをした。これは男も女も同じことです。自分をサムシングと思つていこうちはダメなんです。この世界は自分で体験しなければ分かん。頭でものを言つていのではないから、私も。

福音はご利益ではない。神さまの戦いの世界です。これをしっかりとご利益にして金儲けにしてしまつているとんでもない奴にすっかり惑わされている日本人というのは全く情けない。

本当に柔和な羊が獅子より強い。キリストは羔であるという。キリストは羔でありながら、



いかなる獅子も、いかなる英雄も、キリストにはかなわない。単なる悟りの世界ではない。生命の漲るところの世界です。

### ● 霊的な武装

「10 終に言わん、汝ら主にありて其の大能の勢威に頼りて強かれ。11 悪魔の術に向かいて立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。12 我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威、この世の暗黒を掌とるもの、天の処にある悪の霊と戦うなり。」

悪魔は霊界にいますからね。凄いよ、パウロは。

13 この故に神の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。14 汝ら立つに誠を帯として腰に結び、正義を正義ではなく「義」といった方がいい。

義を胸当として胸に当て、15 平和の福音

平和ではなく「平安」です。

平安の福音の備を靴として足にはけ。16 この他なお信仰の盾を執れ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。17 また救の冑および御霊の剣、すなわち神の言を執れ。

御霊と神の言は同じ。

18 常にさまざまの祈と願とをなし、御霊によりて、

「によりて」ではなく、「にありて」です。

御霊に在りて祈り、また目を覚して、凡ての聖徒のためにも願いて倦まざれ。

19 又わが口を開くとき、言を賜わり、憚らずして福音の奥義を示し、

奥義はミステリオンです。

20 語るべき所を憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。」(エペソ6・10～20)

これは牢屋の中のパウロの烈々たる文句です。もちろん、霊的な戦いの事態を具体的な武器をもって表したので、何も武器そのものをそのまま直線的に肯定しているわけではない。武器は一つも要らないが、

「我々の盾は信仰だ、キリストの義が胸当だ、平安の福音を穿いて行くんだ」

と。福音の事態を身につけることをこういう武器に例えて言っただけの話です。これがエペソ書6章の大事なところですよ。5章よりも大事なのは6章です。こういう霊戦の相は福音の渾然とした有機体的構造になっている。それで、

「そのような霊的な武装をしる。中心は聖霊、御霊の剣だ」

と。聖霊というものは、パウロがここでいろいろなもの挙げたものを全部含めているよ



うな驚くべき内容をもったもので、説明なんかできない。

### ●御霊の戦いの毎日

あなた方、道を歩いてたり何かしている時に、

「私がこうやっているのは聖霊の力だ」

と、時々そういう自覚をもつてください。

「何だか知らないけれども、力が来てしようがないな。これは御霊だな」

と。皆さん、何をなさるのでも、いいですか。

「これはケタが違う質のもので、人にはどう思われようと差し支えない」

と。私の本はひとつもジャーナリズムに載らない。また、載せない。ところが時々、送ってやると、みなびつくりする。どういうことだ？ キリストにおける自信をもって私たちは進む。二級品ではないですよ、皆さん。使徒たちの信交は凄いから、新約聖書は滅びない。

新約聖書は一頁も無駄がない。旧約は無駄がたくさんある。キリストの霊の世界ではないから。キリストの霊の世界というのは、こんな福音が普通の頭で書けるかというんです。なるほど聖書は聖霊がなければ読めない本だということが、それで分かる。聖書の研究会だの、ギリシア語だへブライ語だのとゴタゴタやっている世界ではないんだ。神の根元語の響きに読み入る世界だ。

パウロさんのさっきのエペソ書の霊的武具をもつて、男の方も女の方もみな女傑であり英雄である。キリストが最大の英雄です。

「我すでに世に勝てり」

というのは、そのような英雄である。

賀川さんが完全無抵抗で、最大の英雄であった。かなわないんだ、皆。どんなヤクザもかなわない。どんなに騒いだって、黙って祈っている賀川さんにはかなわない。蹴飛ばされたって、歯を折られたって、賀川さんは勝ってしまう。

十字架につけられたキリストが最大の勝利者なんです。自分で十字架に架かった。相対的現実では、つけられたんだけれども、本当はキリストは自ら十字架に架かった。贖罪のために。キリストはいきなり天界に行けるんだ、エリヤよりも凄いんだから。この御霊の世界は凄い。復活のキリストというのは凄い存在だから。福音書の終りの方に出ているでしょ。あれはみな本当なんだ。

聖書の研究は、学者というのは、

「これは本当だろうか、この辺は宗教物語だろう」

なんて、下らないことばかり言っている。何を読んでいるのかと。皆さんはいわゆる学者である必要はない。霊学の世界を本当にもっている。誤訳の日本語の聖書で結構なんだ。その奥の神の根元語が読めている。文字になんか囚われていない。



「儀文は殺し、霊は活かす」

とパウロが言ったのはそのことです。そういう霊戦なんです、我々の生涯は。御霊の戦いの毎日なんです。必ず勝つ。「勝つであろうか」ではない。

●武蔵野幕屋は分散して生きる

讃美歌を歌う時に、

「…たまわん」

なんて歌ったら、気がぬけてしまから、

「…たもう」

と歌いなさいと言っている。本当の現実をもつて歌わなければ歌にならない。魂をこめて歌わないで、「たまわん」なんて、そんないい加減なところは信交の世界ではない。信交の世界はいつも現実なんです。だから、力がくるんです。

どうぞ、皆さんは、聖書の読み方も、そのようにしてくださいよ。

「何だ、パウロは、これは少し余計なことを言っているな」

と。いいよ、パウロだって余計なことを時々言うから。

私は非常に簡単になつてしまった。本当の力の世界は簡単ですよ。分析総合なんかしてない。ゼロの焦点から限らないものが展開していく。だから、もう聖霊は円で書くよりかしようがない。これもゼロだ。ゼロであり、無限大である。何か文句を書くより、これ（○）だけでたくさんだ。これをジーツと見ていけば、もう御霊の世界に入ってしまう。普通の牧師さんたちは、ごもつともなことを言っているよな。聞いていて眠くなってしまう。私はひとつもごもつともなことは言わない。

「小池先生は少し気が違つてきた」

なんて。気が違つてますよ、普通の気ではないんだ、霊界から来ている気だから。普通の気で話せるかというんだ。霊気で話している。言葉の意味が分かるの分からないのではない。気迫を本当に受けとるかだけの話なんだ。聖書の気迫、霊迫なんていうものは凄いものだから、本当は、たくさんなんか読めやしない。ビーンと来てしまつてね。読んでいるうちに、もうそれが祈りの世界だ。あとは読む必要はない。

新約聖書だけはポケットに入れておきなさいよ、電車の中でもどこでも、すぐそこが天国になるから。少し、あなた方も気違いにならなければダメだよ。マンガなんか読んでいる奴はひつぱたきたくなる。あんなものを見てると、もう日本は滅びの象徴だ。精神的に日本は一番ダメだ。政界も教育界も、この二つが代表的にダメだ。芸術の世界には国境がないから、芸術に携わるひとは本当に御霊の力でやってくださいよ。

「二、三人わが名に在りて集まる所」

でいいんです。皆さんは、どうぞ、身の辺のそういう小さな幕屋を開きながら進んでください。



私が地上を去ったら、この集会はもうおしまい。あなた方はそれぞれ勝手にやってください。

「武蔵野幕屋は分散して生きていますよ」

と、それでいいんだ。そこに、もし、十字架・聖霊がなかったら、それは武蔵野幕屋ではない。ハッキリ言っておきます。

パウロさんは本当に凄い。ヨハネさんだけだったら、これはダメなんだ。ヨハネさん、ペテロさんでは。パウロは、

「**我は罪びとの首なり**」<sup>かしら</sup>

と言った。内村鑑三が「我も罪びとの首なり」と言った。小池辰雄も「我も罪びとの首なり」と、第三番目の首だ。自分を塵芥の如く思うひとが、そこに聖霊が光る。いいですね。

霊戦の気迫はそれでおしまい。

## ●●祈り

祈ります。主さま、み前に平伏します。この僕が数日前から、あなたのみ前に平伏している姿をご存知です。この日は特別な日であることを示されてきました。僕もまたこの日をひとつの峠として進んで参ります。この集会に来た兄弟姉妹たち、特に終りの祈祷会まで残った姉妹たち、兄弟たち、先に帰った人たちに、どうぞ、この消息を伝えてください。私たちはいい加減なことはしません。いよいよ、あなたに在って棄身で進んで行きます。賀川先生が私たちに身をもつて示してくれました。

この武蔵野召団は特に十召団の中の中心ですが、この中心の集会がいい加減で済むわけに参りません。この武蔵野集会はいよいよ火に燃えて進んで行きます。兄弟姉妹たちをその気魄をもって、いよいよ進ましめくださることを信じて、御名を讃え奉ります。

他の九つの召団をそれぞれの所において、どうぞ、いよいよ火に燃やさせていただきます。特に、北海道、裾野、信州、京都、大阪、これらは特に燃えています。いよいよ燃やしてください。私たちはみな、それぞれの在り方をもって十全にあなたの御霊に在って、「エンテレケイア」の現実をいただきながら進んで行きます。限りなく行きます。そのようにして、この福音の証者たるこの召団の群が——数ではありません。あなたの本当の弟子は数人でした。パウロ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、この四人が中心になって新約聖書は成っていききました——この驚くべき御霊の現実を、使徒たちのこの現実を慕って、私たちは本当に喜び勇んで進んで参ります。どうぞ、一人びとを十全にお使いください。そして、その特別な光を、一人びとを通してお現しくださることを願ひ奉ります。また、いろいろな事態にでつくわせばでつくわすほど、我々には御霊の力が働くことをいよいよ体験せしめてください。ありがとうございます。あなたの勝利をいただきながら、いよいよ進んで行きます。

尽くせませんが、心からの感謝と讚美と祈りを、兄弟姉妹たちの全身にあるそれと共に、御名に在って捧げ奉る。アーメン。

